情報をお寄せください
〒121-0831　足立区舎人 2-2-26
足立よみうり新聞編集局
電話 5647-4343 FAX5647-4388
hensyu@ayomi.co.jp

足立よみうり

THE ADACHI YOMIURI SHIMBUN 〔第732号〕

12月 5 日(金)
2025年(令和7年)

発行所
株式会社 足立読売
〒121-0831 東京都足立区舎人2-2-26
電話 03(5647)4343(代)
FAX 03(5647)4388
HP http://www.ayomi.co.jp/

発行日
第1金曜日
配布エリア
足立区全域、葛飾区の一部
足立よみうり ホームページ

光の祭典で花火

今年も開催 12月25日まで

ボタンを押すと花火のイルミネーションが

年末の風物詩「光の祭典2025」が、11月29日から25日まで、竹ノ塚東口から竹の塚けやき大通り、元渕江公園までをイルミネーションで彩られる。点灯は午後5時から9時まで。

29日には、元渕江公園で点灯式が行われるとあって、この日だけで約4万2000人が来園した。午後5時、カウントダウンとともに一斉にイルミネーションが点灯されると、来場者からは歓喜の声が上がった。

園内の釣り池には「わくわく◇HANABI」が初登場。今年の〈足立の花火〉は中止になったが、ボタンを押すと池の中に設置された花火のイルミネーションが様々なパターンで花火のように光る。

なかまんま食堂

ごはんで楽しく安らいで

宇佐美農園の野菜や米の寄付も

「おいしかった！」親子と夫婦が相席で楽しく食事

地域の人たちへ恩返しを

皆で楽しく、なかまとまん。「なかまんま食堂」は、代表の「地域の人たちへ恩返しをしたい」という思いから始まった。

「居酒屋SHO—GUN」（辰沼2-4-16）で10月25日から、「なかまんま食堂」（片桐節子代表）が開催されている。

お世話になった地域の人たちに何か恩返しを、と考えていた片桐さんは友人の「好きな料理を生かせばいいじゃない」との言葉から子ども食堂を検討。店では店主の富秋昌光さんが、毎月第1・第3土曜に「子ども食堂SHO—GUN」を開いており、縁がつながり場所を提供した。

名前の由来は「なかま十まんま」。子どもの頃から祖母と共に8人家族の食事作りを担い、3人の息子の母となっても、息子の友人など約10人分を作ったとか。名前には、ごはんを介して皆に楽しく安らいでほしい、寂しい人がいなくなるようにとの思いもこめた。

2回目となる11月22日は、元調理師の夫、誠さんも参加。甘酢とタルタルソースを添えた唐揚げ、誠さんが釣った魚のアラの味噌汁、間引き大根の葉のふりかけなどを提供した。知人の村関優美子さんはじめ、地域にある宇佐美農園など賛同者の協力のもと、子ども・65歳以上は無料になる食堂は、子どもたちや親子連れ、夫婦、友人同士など地域の人たちで賑わった。この場所での開催は12月27日が最後。来年1月からは神明住区センターで開催される。

かわかぜ

2025年もあと1か月あまり。今年も毎月1回発行してきた◆2万5410。割付用紙に印刷されてはすなわち文字数だ。その1つ1つを埋めていくのが編集作業である◆編集会議は「立ち会い」から始まる。それぞれの記者が集めてきたネタを出し合う。もちろん読者からの情報提供も数多くある。新聞には紙幅がある。無制限に掲載することはできない。次の編集会議でネタの取捨選択をしていく。記事の話題性があるかなど様々な視点から話し合う◆採用する記事を決め、担当記者を割り振っていく。あとは取材を進め、確認作業をしていく。小紙の場合は、割付を先行させ与えられた行数で記事を書き推敲していく。そして2万5410の〈玉〉を埋める。正直面倒なことだが、それが楽しいし、ワクワクする◆求人サイトのテレビCMで、タモリと宮沢りえの掛け合いがあ る。レコードをクリーニングしているタモリに宮沢が「いちいち面倒臭くないですか」と聞く。タモリは「面倒だからいいんじゃないの」。これですね。来年もよろしく。（ん）